

政策学なるものを学ぼうとしている皆さんが、味気ない政策のお勉強ではなくて、政策のかたちで現れる世の中の動きについての学修を楽しみたいと感じていただけるような、そんな本をつくりたいと考えて、本書を出版することにした。当たり前なことだが、勉強は嫌いだけという方々にも、でも世の中が少し変だな、どうなっているのだろうと、不思議に感じて、少しは関心をおもちになることがある。こんなほんのちょっとした「疑問」や「不思議」という感覚について、もう少しあれこれ考える手がかりがあると、考えやすいし、考えることが好きになるかもしれない。そうすると、他の人ともその話ができるかもしれないし、会話が成り立つかもしれない。

昔から、日本でも外国でも民衆は政治の話が好きだった。そのなかには政治家あるいは支配者の私事も多く含まれていたが、同時にその施政について、裁判やまつりごと、あるいはその定めやお触書などについても、よく語られていた。それらは日常の暮らしに近いことであれ、遠いことであれ、好んであれこれの議論がされてきていた。講談や落語の題材になっているような、いわゆる床屋政談である。今風に言えば政治や法律、そして政策のあれこれを議論するのは、皆に共通する大好きなことのひとつのようである。

たとえば大学の政策学関係のカリキュラムを見ても、それを勉強だと考えてしまうと、単位取得のために仕方がないから学ぶという苦しい作業になるのかもしれない。けれども、そうではなくて面白そうな政策、関心が向いた政策のことを議論するのは楽しいのだと考えられないだろうか。そうだとすると、楽しいところから始める政策学があってもいい。政策談義を楽しんでもらえるような、そして政策学をいつの間にか学んでいるような、そんな入門書ができたらすばらしいと著者一同は考えてきた。

もちろん、政治や政策のことを理解するためには、多少の読み書き・そろばん的な知識の基礎は必要だが、そんなものは、義務教育や高校卒業までに、ほ

とんどの方々が修得しているはずである。そのうえで、なおよくわからないけれども、関心をひかれて重要そうに見える、社会的に争点になっているような政策問題について、どんなところを糸口にして理解していったらいいのか、そしてそれに必要な情報をどのように集めてみたらいいのか。楽しく学びながら、そんな方法がいつの間にかわかって身に付いてくる、そんな教科書をつくってみたいと思っている。

本書の著者たちは、それぞれの文章のなかで直接的に自分からそう言っているかどうかは別にして、政策学や政策問題に強い関心をもってそれを面白がっているうえに、世の中のことを何でも政策的に考えるのが好きな人たちである。そしておせっかいかもしれないが、その楽しさを皆さんにも伝えたいと思っている人たちでもある。

いま、日本全国に、政策という言葉が入った名称をもつ学部・学科、あるいは専攻やコースがたくさん設けられていて、筆者が知っているかぎりでも90校以上はあるのではないか。そんななかで、政策問題や政策学を楽しみとして語ることができないなんて、こんなにもったいないことはない。皆さんに政策への関心をもってもらいたいし、楽しんで学んでほしいし、面白く議論してほしい。なぜ政策や政策学を学んでほしいのか、その理由はたくさんあるのだが、まずは政策学に入門してほしいし、本書がそのための第一歩になれば、著者一同こんなに嬉しいことはない。

2013年4月

編者 新川 達郎